

発表サマリー

「現代的イスラミック・グリーフケアの展開と伝統的解釈学の連関」

報告者：兼定 愛 (KENJO, Megumi)
慶應義塾大学環境情報学部非常勤講師

1. 発表内容

過去 10 年間で急速に発展している「イスラーム心理学」について、その成立の社会的背景と研究動向を整理し、また、伝統的なクルアーン解釈学がそこで果たす役割について考察することを目的として研究発表を行った。まず、「イスラーム心理学」の代表的な書籍の内容の変遷を整理し、その成立の社会的背景と近年の動向を明らかにした。次に、その中で伝統的イスラーム学がどのように位置づけられているのかを明らかにした。最後に、それを踏まえ、「イスラーム心理学」の今後について展望した。

元来、伝統的なイスラーム学において人間の心理を扱う議論は豊富であった。イブン・スィーリーーン (728 年没)、ジャーヒズ (868 年没)、キンディー (866 年没)、タバリー (870 年没)、ラーズィー (932 年没) らの著作が残っている通りその歴史は長く、特にガザリー (1111 年没) は日本でも有名である。しかし、それを近代西洋心理学と統合することにより実際的に現代人に資するメンタルケアの在り方を探究するという意味において、「イスラーム心理学」は、一つ思想運動とも、新たな学問分野ともいえる。そのような「イスラーム心理学」の背景には、西洋心理学のみでは対処しきれない現代のムスリム患者の心因性の病理を巡る問題が顕在化してきた状況がある。さらにその背景には、欧米におけるムスリム人口（移民や改宗者）の急増や、イスラーム圏で暮らすムスリムの生活・思考様式の西洋化が関係している。また、現代のムスリムにおける「イスラミック・グリーフケア」への需要の高さは、2002 年にリヤドで出版され世界的ベストセラーとなったカルニー著『ラー・タフザン（悲しまないで）』が、現代人の多様な悲しみへのイスラーム的対処法について伝統的イスラーム学者兼説教師が論じた書籍であったという点にも表れている。

そのような状況下でグローバルに発展し続ける「イスラーム心理学」には、地域を超えたムスリム心理学者の連帯が見られる。主な研究者の出身地や研究・教育拠点は、欧米、南米、中東、中央アジア、東南アジアなど様々であり、近年は欧米の大学の心理学部にイスラーム心理学コースが新設されるなど具体的な変化も生じている。現代における学問的展開の端緒を探ると、1979 年に出版された、マーリク・バドリー (2021 年没) 著『ムスリム心理学者らのジレンマ』に見出せる。スーダン出身のバドリーは英国リーズ大学で博士号を取得した心理学者であり、この著作は 1969 年に北米の学会で発表した論考を発展させたものである。この本の中でバドリーは、西洋心理学とそれに固執するムスリム心理学者とを批判し、また、人間の生活や思想といった多分野に密かに横たわる「トカゲの穴」（熟慮せず無批判に先人を模倣することを意味する表現。預言者ムハンマドの言行録であるハディースに由来する。）の畏からムスリムを守ることを、自身の目的として明言した。そこにはバドリー

の、西洋心理学への希望とムスリム心理学者への期待が込められていた。

バドリーによれば、西洋心理学の決定的な問題点は、その根底にある、魂を抜きにした人間観、つまり、サルから進化したヒトとしての人間観である。これはイスラームにおける、アッラーに選ばれ天使より高位に置かれた特別な創造物としての人間観とは相容れない。しかし、当時アラブ諸国の心理学者の間ではフロイト主義が根強く、バドリーは猛反発に遭った。一方で、フロイト心理学の権威が既に揺らぎ、認知療法など多様な手法の展開が見られていた欧米の心理学者からは熱烈に歓迎された。しかし、政治的な文脈における「イスラーム主義」への危機意識が高まる当時の欧米社会では、イスラーム思想的な側面を強調することは困難であった。それでもバドリーの影響のもと、世界中のムスリム心理学者の間でこの分野への関心は高まり続けた。彼は「現代イスラーム心理学の父」と称され、英国とスーダンの他、ヨルダン、レバノン、サウジアラビア、スーダン、エチオピア、マレーシアでも教鞭をとった。その後、様々なムスリム学者によって蓄積された臨床経験や文献研究に基づく豊富な研究成果が2013年頃から急速に公開され始め、2023年現在に至るまで増加傾向にある。このように「イスラーム心理学」は、イスラームに反する人間観に基づく西洋心理学に隷属するムスリム心理学者への批判の上に成立し、近年急速に発展している。これは心理学的イスラーム復興と表現し得るものである。

一方、当該分野内では「イスラーム」という語の乱用について危惧するケシャヴァルジーらの議論もある。つまり、現代人に適したかたちの革新的なイスラーム的心理学の構築と普及はムスリムの健全な精神を補助し得る手段として期待されるが、その根底には伝統に基づく慎重で正確なクルアーン理解が求められる。それを実現するための模索は、「イスラーム心理学」という基本的な名称のほかに、IIP (Islamically Integrated Psychotherapy)、TIIP (Traditional Islamically Integrated Psychotherapy)という新たな名称についての議論があることから見て取れる。

以上を踏まえ、今後、イスラーム心理学と伝統的クルアーン解釈学とをより有機的に繋ぐ媒体として、クルアーン解釈学研究が期待される。伝統的な「クルアーン解釈学」では心理学的な概念を巡る議論が展開されてきた一方で、近代西洋的な研究分野である「解釈学研究」では、その点が十分に注目されてこなかった。そのため、今後は心理学的概念を軸とした解釈学研究の発展が課題となる。また、さらなる展望としては、イスラーム心理学の一分野として論じられる「非ムスリムのためのイスラーム心理学」の議論を参考に、日本におけるグリーフケアに関してイスラーム心理学が果たし得る役割について検討することにも意義があると考えられる。

2. 発表後の議論について

発表後は、コメンテーターである大川玲子教授と新井和広教授からの親身で建設的なコメントをはじめ、参加者との間で有意義な議論が行われた。たとえば、イスラーム心理学を巡る動向を現代における思想研究として位置付けてより深く考察することの重要性が指摘さ

れた。また、それに関連して、「知識のイスラーム化 (Islamization of Knowledge)」という、20 世紀後半に提唱された、近代西洋で発展した諸学問分野の成果と伝統的イスラーム諸学とを繋ぎ合わせ学問の枠組みを再編する運動と、イスラーム心理学との関係性についての議論もあった。これについては今後さらなる研究が必要であるが、様々な点から両者の深い関係が推察されるものであり、その意味でも、イスラーム復興の文脈に位置づけてイスラーム心理学を捉えることの重要性が確認された。また、今回はイスラーム心理学関連の書籍を研究対象としたが、2018 年創刊の学術誌 *The International Journal of Islamic Psychology* 等を用いて、近年の学問的動向をより正確に把握すべきという指摘も受けた。この学術誌の創刊自体がイスラーム心理学の盛況ぶりを表すものであるという点も興味深い。また、大川教授が米国で生活する中で出会った人々や、街中に点在するイスラーム系のカウンセリング施設、一般人の間でのスーフイズムへの関心の高まりなどについての情報からは、現地でイスラーム心理学が浸透しつつあることを実感し、今後につながる多くの知見を得ることができた。